豊後キリシタン年代記

1551年～1553年

Chronological History of the Christianity in Bungo

(1551～1553)

溝　部　　脩

OSAMU MIZOBE

序　　文

豊後キリシタン史については，今までに種々の形で書かれて来た。ここに改めて新しく，それを書きかえる気持は毛頭ない。むしろ，1551年に始まるキリシタンの歴史を，年代を追って事件を羅列し，そこに生きた人物と思想を隙間見ていこうと考えた。できることなら1640年代位までまとめてみたいと思う。

方法論としては，宣教師の書翰を今一度読直してみることであった。そして，そこに私が分る範囲内で注を附加して，その歴史的意味を理解するように心がけた。また，豊後の歴史の枠の中でキリスト教の発展を把えてみるつもりで，大友家の興亡を追ってみた。てき確にその枠づけがなされていないと，私は思っているが，書いているうちに分って来るものだと考え，一文にした。

1551年（天文20年）

1550年２月，大友義鎮は，父義鑑が「大友二階崩れの変」で傷ついて死去した後を継いで，大友の家主となって一年余りとなっていた(1)。父の帯した豊後，肥後両国の守護職を将軍から安堵されていた。肥後の菊池義武を隈本城に破って（1550年８月），その意気も昂かった。山口では1551年９月29日，陶晴賢に攻められて，大内義隆は自害して果てた(2)。義鎮がその勢力を伸ばし始めた年でもある。

1551年の晩夏，一隻のポルトガル船が豊後の日出港に着いた。ドアルテ・ダ・ガーマがその船長であった。彼は1549年から1556年まで日本貿易に従事し，イエズス会士の有力な後援者であった。とくに，フランシスコ・ザビエルの称賛者であった(3)。

山口に居たザビエルに，ポルトガル船来航の報せが届いた。ザビエルはそのことを確かめるために，マテウスという，山口で改宗した新しいキリシタンに船長と商人宛の手紙をもたせて，陸路豊後へ遣わした。マテウスは９月１日付のザビエルの書翰を持参した。ポルトガル人はそれを受取り，返書とゴアから持参した彼宛への書翰をマテウスに手渡した(4)。

義鎮はフェルナオ・メンデス・ピントやディエゴ・バスなどとの交流があり，フランシスコ・ザビエルのことについては聞き及んでいたであろう(5)。ポルトガルとの交易は，豊後のために益すること，少くとも始めはそのように考えていた。義鎮はそこで，ザビエルを豊後に招待した。ザビエルは義鎮の招へいを喜んで受けた(6)。

豊後からの返書を受取ったザビエルは，平戸に居たトルレスを山口に呼んだ(7)。トルレスは山口に９月８日到着。彼は山口義隆の死去20日前に山口に居たと証明している。義隆の死は９月30日である(8)。トルレスは到着後，ザビエルは山口にフェルナンデスを通詞として残し，豊後に向って旅立った。９月の中旬のことである。ザビエルはジョアン・ベルナルド・マテウスを従者として伴った。

ベルナルドは「薩摩生れで，日本で最初に洗礼を受けた者であって，われわれの会の最初の日本人イルマン。ローマでわれらの聖パードレ・イナーレオに迎えられ，コインブラで歿した」(9)。彼は外貌は余り魅力的ではなかった。しかし信仰に熱心だったと記されている(10)。ジョアンは鹿児島からザビエルに従ったもので，通訳として豊後に行ったものと思われる(11)。

山口を発つとき，ザビエルは山口の信者達，トルレスとフェルナンデスに最後の別れをした。陸路で一日半の

道程を歩き，ある港に辿り着いた。シュッテ師は下の関と判断している(12)。陸路を歩んでいる途中で，ガーマ船長が送ったポルトガル人に出合った(13)。下関から海路で沖の浜港に到着した(14)。フロイスは山地を600マイル歩いたとしているが，多分誤りであろう(15)。

ガーマは礼砲を鳴らし，旗を掲げてザビエルを歓迎した。ガーマはイエズス会士に対して日頃尊敬を抱いていたし，とくにザビエルを尊敬していて，このように歓迎したことは府内の住民に強い印象を与えた。ピントが描くような歓迎ではなかったとしても，ガーゴが到来した年にも人々に語りつがれていた，印象深い事件であった(16)。

義鎮はザビエルを心よくもてなした(17)。ガーマはザビエルが謁見するに当り，ポルトガル人を盛装させて，行列していった。町の住民も城中の人々もこの話でもちきりであったことは想像に難くない。

ザビエルと義鎮の出合いについては分らない。しかし，これが義鎮の生涯に大きな影響を与えたことは否めない。ザビエルは二ヶ月の間，大友の館を訪れ，親しく交った。しかし，義鎮にはまだキリスト教を受けいれる時機は熟していなかった。ロドリゲスの表現を借りると，「年も若く，御法を受入れる準備ができていなかった。つまり，青春の時代であったが，その時期にはデウスの御法に相反するものはきっぱりと切捨てる必要があったのである」(18)。ザビエルが義鎮の改宗のことを考えたとしても，義鎮の方の興味は別にあったようである(19)。

ザビエルは府内滞在の二ヶ月間で，義鎮から領内で宣教する許可を貰った。領内に宣教師を喜んで迎え入れること，布教の許可が与えられること，もし誰か改宗したければキリスト教徒になる便宜が図られることといった約束にこぎつけた(20)。

ザビエルは豊後に到着して，ポルトガル人のメンデス・ピントから300クルサードを借受けた。それを山口教会建設に用いるためにトルレスに送った。この300クルサードは，マラッカの長官ペドロ・ダ・シルバがたてかえてピントに払い，長官にはゴアのコレジオの収入の中から後程支払われた(21)。

ザビエルが豊後に居た間に，山内義隆は家臣の陶晴賢の反乱にあって，自害して果てた。9月29日～30日のことである。その報告が山口のトルレスとフェルナンデスからザビエルのもとに伝えられた。従僕のアントニオが豊後に便りを持参したのが10月の終りであった(22)。この頃，山口から晴賢の使者が義鎮のもとを訪れ，彼の弟，入郎晴英を領主として迎えたい意向を打診していた。ザビエルは義鎮も晴英も自分とキリスト教に好意的であったのに，期待を大きくした(23)。

ザビエルは府内滞在2ヶ月の間に，ポルトガル船員の告白をきき，聖体を授けるなどの聖務を果した。しかし，通常は沖の浜の日本家屋に起居していた。ザビエルの宿主，沖の浜のブラスが改宗して，受洗した。彼は豊後での最初のキリスト教徒である。彼の妻と兄弟ペドロも改宗した。そのとき，アントニオという男も改宗した。彼は1565年，アルメイダが臼杵に行ったとき，彼の宿主となったとあるので，臼杵の人であろう。兄弟が仏教の高僧で，1565年，府内でキリスト教徒として死去した一人の中年の婦人もザビエルによって改宗した(24)。

ザビエルの宣教に当って通訳となったのは従僕のジョアンであった。洗礼は少かった。多分，インドでヤジローを使って編んだ，ごく初歩的なカテキズム(教理問答)を，豊後でも用いて話したことであろう。このカテキズムは，ヌーネスの来日とともに改訂され，更に1570年，カブラルの来日の折，再改訂された。鹿児島発のザビエル書翰中に，「当冬とは日本語にて信仰箇条の詳細なる解釈を作り，これを印刷することに従事すべし」と見出される(25)。このカテキズムと山口での経験を併せて，細々と宣教したことであろう。しかし，彼の宣教の背後にはポルトガル船と義鎮の好意的な後楯があることも忘れてはなるまい。

11月中旬，ザビエルは府内を出帆する前に義鎮を訪問した。そのとき，今後到来する宣教師に住居を与え，自由を保証してくれるように頼んだ(26)。義鎮はその折，自分の家臣をインドの副王ドン・アフォンソ・デ・ノローニヤに使節として送った(27)。使節は義鎮の書翰と贈物の甲冑をポルトガル王宛に持参していた。また副王宛への書翰と贈物もたずさえていた(28)。書翰の中で，義鎮は「通商と友好」を願っていた(29)。更にイエズス会の司祭の派遣も願っていた(30)。

義鎮の使節はザビエルによって改宗した。代父となったのは，マラッカからゴアまでの船長であった，ディエゴ・ペレイラであった。彼の名をとって，ロレンソ・ペレイラと呼ばれた(31)。フロイスは，「この使節は航海中パードレと交ったことによって，後日キリシタンとなり，パードレは彼にロレンソ・ペレイラという霊名を与えたが，このロレンソ・ペレイラは今日も尚豊後に生存している」と言っている(32)。彼はゴアで受洗し，1552年ガーゴと共に豊後に帰り，フロイスの言う通り，1586年に尚キリシタンとして存在していた。

ザビエルはマテウスとベルナルドの二人を同伴した。この二人はローマに行く予定であった。ジョアンとアントニオも乗船した(33)。マテウスはゴアで死亡し，ベルナ

ルドはコインブラのコレジオで死亡した(34)。彼等は日出港を出帆して，下関を通って日本を離れた(35)。

1552年（天文21年）

晴英は陶隆房に迎えられ，三月山口に入り，大内義長と名乗った。義長は豊後でザビエルにキリスト教保護を約束していて，大内氏を継いで後，それを実行したものと思われる。半年たって８月28日付の布教裁許状が出された。現在はリスボンの図書館に残っている。義鎮はこうして鎮西に威を振うこととなる。

ザビエルは４月17日，ゴアを出帆，支那に向った。バルタサール・ガーゴ神父，ドワルテ・ダ・シルバ修道士とペドロ・ダルカセバ修道士が同行した(1)。ガーゴとその一行は６月６日，マラッカを出発し，８月２日，支那を発って，同月14日，種子島に到着した。８月22日，小舟に乗りかえて，９月７日，豊後に到着した(2)。

義鎮は彼等に宿泊する家を与えた。翌日，彼等はインド副王の贈物を義鎮に持参して，謁見を乞うた。「立派な武器と他の進物」とフロイスは言っている(3)。義鎮はこれを喜び彼等に食物をとどけさせた。

同船で義鎮の使節ペレイラも帰国した。おそらく彼のインドや航海中での経験談を注意深く義鎮は聞いたであろう。またこの間に前年ザビエルによって改宗した人達とペレイラも含めて，ガーゴとの最初の集りが開かれたことは推察に難くない。

山口に居たトルレス神父はガーゴ達の到着の報せを聞いて，フェルナンデスを通訳として豊後へ遣わした。フェルナンデスは平戸・山口での経験を有していたし，日本語を理解できた人でもあった(4)。彼は1526年，富裕な商家の息子としてコルドバに生れ，リスボンで兄を助け，絹・ビロードの商売を営んでいたが，その頃イエズス会のストラダ神父の説教を聞き，感動してイエズス会への入会を願い出た。1548年にインドに遣わされ，ゴアのパウロ学院で日本人アンジローから日本語の手ほどきを受けた。ガーゴはすでに1555年，彼について，「日本語を母国語よりも上手に話す」と書いている(5)。後にフロイスと共に日本語の文法書，辞書を編纂する仕事もした(6)。しかも，ただ単に日本語の知識のみではなく，1551年の書翰から分るように，宗論を通しながら日本と日本人についての知識を深めていたことであった(7)。

ガーゴはフェルナンデスを伴って義鎮と面会した。そのときに，「神は天地の創造主，悪魔のこと」などの話を聞かせたと言う(8)。フェルナンデスは山口での経験を基にして，義鎮にキリスト教のことを語ったであろう。

義鎮は神父達が豊後に留るのを望んだ。また彼等を介して，インドの副王と通信することを望んだ(9)。そして，豊後にキリスト教を宣教する自由を約束し，改宗するものを保護すると約束した。しかし，ガーゴはまず長上であるトルレス神父に会って，山口での布教裁許状なるものを見て，相談してから，豊後の布教を始めることを望んだ。ガーゴ達はこうして，義鎮の願いをふり切るようにして山口に旅立った。山口は義鎮の弟・義長が治めていた。その年の降誕祭はトルレスと共に，ガーゴ神父と３人の修道士も加わって壮厳に祝われた(10)。

1553年（天文22年）

1553年２月４日，ガーゴはフェルナンデスとダルカセーバを伴って豊後へ出立した。山口での義長の裁許状の写しを持っていたであろう。10日，豊後に到着した。ダルカセーバはインドに帰国する旨を義鎮に伝えると，彼はインド副王宛の書翰を認めた。贈物に感謝し，彼は宣教師を保護し，居住所を与えることを副王に約束していた(1)。２月14日，ダルカソーバは書翰をたずさえ，平戸に向った(2)。

灰の水曜日の翌日，２月16日，一万田弾正忠，服部右京亮，宗像民部少輔など大身三人の反乱が起った。町は火で焼かれたが，宣教師の蔵は無事に残った(3)。加来民部，加来将監兄弟が義鎮の命で一万田弾正忠父子と高崎一族を殺し，山下二郎が服部右京亮を殺した(4)。事件については詳細は分らない。義鎮の好色が原因であるという説がある(5)。ともかく，義鎮の地位は未だ安定していなかった。

火事後，ガーゴ達はある僧侶の家に移り住んだ。かくして，本格的に豊後でのキリスト教宣教は始まった。ガーゴは1515年，リスボンに生れ，1546年，イエズス会に入会し，1548年インドに渡り，ついで日本へと渡来した。彼は教会用語をてき確に使い分けるという重要な役割を果した。彼は最初の宣教で，宗論に来る仏僧や武士の中にあって，多くの仏教用語をキリスト教で用いると紛らわしいことに気づいた。ザビエルは早くもそれに気づいて，大日をデウスに置きかえた(6)。ガーゴは論争の中で，言葉が明瞭でない場合には，「ラテン語，又はポルトガル語」を附加した。仏教用語の意味を説明して，その誤りを説き，ついで自分達が使うそのことばの意味を説明したと彼は言っている(7)。

上記のことを考えてガーゴを判断すると，かなり日本の問題に早くから着目して手がけていることに気づく。1555年には，ガーゴは一書を編し，これを日本訳にして義鎮に献呈したとある(8)。彼は日本の布教に関してかなり準備された人と見て然るべきである。

僧侶の家に住んでいる故以もあって，僧侶との論争がたたかわされた。フェルナンデスが山口より1551年に送った書翰から判断して，日本人との論争の主要点は次のようなものだったと考えられる。東洋的思考法と西洋的合理主義の間での論争には喰違いが多かったであろう。

1．万物の始めと終りについて。　「無に帰す」ことか，「本源に戻る」といった涅槃についての論争があった。

2．人間について。　理性を有した人間の霊魂は不可分であり，人間の理性はものの善悪を知り，良心の苛責はここから生れる。

3．人間の霊魂について。　人間の魂は不滅であり，永却に喜ぶか滅ぶかのどちらかである。

4．現世とは，死とは，地獄とは。

5．神について。　万物の創造主デウスとは第一原理である。彼を直観することは至福である。彼は遍在であり，全知全能である。

6．悪について。　万物を創造して善と見なしたのにどうして悪が生れるのか。現世の苦しみとは何か。人間の傲慢によるものであり，自由意志によって悪を好む。

7．悪魔について。　悪魔も神によってつくられた。ただし，自分の傲慢によって神に背いた天使である。

8．十誡について。　人は神につくられた目的にそって生きることが大切である。

9．貞潔について。　貞潔を守ること，男色を捨てること，一夫一婦制の尊さ，離婚の禁止といった性に関する問題。

10．宣教について。　キリスト教が救いなら，何故今頃日本に伝わったのか。今までの人々の救いはなかったのか(9)。

激しい論争は憎しみをもたらした。投石，その他の事件が起るので，義鎮は宣教師の居住所に護衛兵を立たせた(10)。宣教師達は「人肉を食べる」と言いふらしたり，悪魔つきだとものののしった。路上でいやがらせをする人々も居た(11)。しかし，義鎮の命もあり，それ以上の害を加えることはできなかった。

義鎮の保護の下に，ガーゴ達は着々と成果をあげていった。受洗した人は熱心にキリスト教を町の人々に説いて廻った。府内から一レグア離れた所に居る身分のある人が，ガーゴに教えをたれに来てくれるように依頼した。こうして一度に30人受洗した。キリシタンの鍛冶屋のこと，病気の娘のことなどが，ダルカセーバの手になる書翰に見出される(12)。この一年間，700人前後の人々がキリスト教徒になった(13)。

同年，義鎮はガーゴに土地を寄贈し，家屋を建てるようにさせた。1555年の書翰でガーゴは「同国の領主，一の地所を与えたが，我らは住院及び礼拝堂を建て，直に高き十字架を一基立てた」と述べている(14)。おそらく簡単な住居をその土地に建てたであろう。礼拝堂は150名収容できた(15)。建築のときには身分あるキリスト教徒は炊出などの仕事をし，キリスト教徒一同で石運びをしたり，釘を打ったりするのを見て，人々は大いに驚いた(16)。十字架を立てた日はマグダラのマリアの祝日の前日，7月21日のことであった。同地に滞在していたポルトガル人2名とキリスト教徒一同列席して，その熱心を示した(17)。居住所は慈悲の聖母 (nossa Senhora da Piedade) にささげられた(18)。

1551年

(1)　九州治乱記，大友興廃記
外山幹夫「大友宗麟」昭和50年，吉川弘文館　18－26頁。

(2)　福尾猛市郎「大内義隆」1959年，吉川弘文館

(3)　フロイス　日本史Ⅰ　昭和48年，東洋文庫 106頁。
ロドリゲス　日本教会史　下巻　1970年，岩波書店 482頁，注19。

(4)　ロドリゲス　同上 482頁。
Wicki J. S. J, Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta, tomus II, Romae, 1945, 271頁。
Monumenta Xaveriana, I. Sancti Francisci Xaverii epistolas aliaque scripta complectens, quibus praemittitur ejus vita a p. Alexandro Valignano S. J. ex India Romam missa, 1899－1900, 690頁。

(5)　ピントの旅行については不信な点が多いが，豊後に数度来航したことは確実である。G. Schurhammer, Fernao mendez Pinto und seine《Peregrinaçam》, in Asia major 2 (1926) 72－103 ; 196－267。
バスは府内に5年も滞在していて，義鎮がそのことを後にフロイスに語った。フロイス，「日本通信」下 288頁。
バスは商人なのに毎日朝晩祈っているのを見て，義鎮はその訳を尋ねたと言っている。ロドリゲス，同上　下 498頁。

(6)　ロドリゲス　同上　下 482頁。
ＥＸ　Ⅱ 271頁。

(7)　フロイス　日本史Ⅰ 106頁。

ロドリゲス　同上　下 483頁

(8) ＥＸ　II　271頁。

(9) ロドリゲス　同上　下 488頁，注24。

パスカル・デ・エリア，「ローマを訪れた最初の日本人（1555年)」,キリシタン研究第五輯，1959年

(10) フロイス　日本史　I 108頁。

(11) フロイス　日本史　I 106頁。

(12) Fr. Schütte, Introductio ad Historiam Societatis Iesu in Japonia, 1548－1650, Roma 1968, 549頁，注 2

(13) ロドリゲス　同上　下 486頁。

(14) シュールハンメル師は，ザビエルは沖の浜に到着したのであって，日出ではないと力説する。ゲオルグ・シュールハンメル,「日本に於ける聖フランシスコ，ザヴィエル」,キリシタン研究第一輯，309頁，注19。

ピントは府内より１マイル離れた港にザビエルは到着したと言っている。日出は府内から３マイル離れた港である。しかも新改宗者が沖の浜のものとあるので，ピントが言う Canafama が沖の浜に相当するものであろう。沖の浜については異見が多い。岡本良知，「戦国時代の豊後府内港」，大分県地方史，10号。渡辺澄夫，「古代中世の大分」，大分県地方史 73号。

フロイスは1596年の津波で沖の浜は沈没したと言っている。一フロイス，大分県史料　14。

(15) フロイス　日本史　I 106頁。

シュールハンメル,「日本に於ける聖フランシスコ・ザヴィエル」同上 309頁。

(16) ガーゴ書翰　1555年９月20日，平戸発，耶蘇会士日本通信，豊後篇，上，昭和11年，75頁。

(17) ＥＸ　II 271頁。

フロイス　日本史　I 107頁。

(18) ロドリゲス，同上 496頁。

(19) ＥＸ　II 271頁。

義鎮の不行跡については日本の文献にもあるし，宣教師の方も，彼が改宗しなかった理由の一つにこの問題を考えている。大友記，九州記，ロドリゲス，同上 496頁。Frois L., Segunda Parte da Historia de Japam, editados e anotados por Jõao do Amaral Abranches Pinto e Yoshitomo Okamoto, Toquio 1938, 43。

外山幹夫は，彼は好奇心の強い戦国大名であったとしている。何事も吸収しようとした彼の20代，30代を理解すると，キリスト教とのかかわり合いが理解し易くなるのであろう。外山幹夫，同上，15－18頁。

(20) ＥＸ　II 271－273頁。

ロドリゲス　同上 494頁。

(21) ロドリゲス，同上 488頁。

ＥＸ　II 304－305；467頁。

(22) フェルナンデス，ならびにトルレスの書翰，1551年，シュールハンメル，「山口の討論」，昭和39年，118－122頁，161－164頁。

(23) ＥＸ　II 273頁。

(24) シュールハンマー，「日本に於ける聖フランシスコ」同上，310頁。

(25) ロドリゲス，同上 366頁。

ザビエル書翰　1549年11月５日，鹿児島発,「日本通信」上　22頁。

ザビエル書翰　1552年１月29日，コチン発,「日本通信」上　66頁。

(26) ロドリゲス　同上 529頁。

(27) ＥＸ　II 273頁。

ＭＸ　II 977－978，761－762頁。

フロイス　日本史　I 107頁。

(28) ＥＸ　II 273頁。

(29) ロドリゲス　同上　528－530頁。

(30) フロイス　日本史　I 107頁。

(31) ロドリゲス　同上 529頁。

Löhnholm, Arai Hakuseki und P. Sidotti, mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens 6, 1894.

(32) フロイス　日本史　I 107頁。

(33) ＥＸ　II 355－358頁。

(34) ロドリゲス　同上 530頁。

ＭＸ　I 904－905；730－733頁。

Documenta Indica, vol III Romae 1954, P. 337, n. 31

(35) ロドリゲス　同上 531頁。

シュールハンマー，「日本に於ける聖フランシスコ」同上 279頁。

1552年

(1) フロイス　日本史　I 134頁。

ダルカセーバ書翰　1554年ゴア発「日本通信」上 68頁。

(2) フロイス　日本史　I 134頁。

ダルカセバ書翰　同上　68頁。

(3) フロイス　日本史　I 134頁。

(4) ＥＸ　II 99；100

(5) ガーゴ書翰，1555年９月23日，平戸発「日本通信」上 148頁。

(6) フロイス　日本史　I　202頁。
(7) シュールハンメル,「山口の討論」, 同上 127－165頁。
(8) ダルカセバ書翰　同上 70－71頁。
(9)　〃　〃　71頁。
(10) フロイス　日本史　I　138頁。

1553年

(1) ダルカセーバ書翰　1554年ゴア発「日本通信」上 73－74頁。
(2) フロイス　日本史　I　141頁。
(3)　〃　〃　〃　143頁。
(4)「大友文書録」「到津文書」
(5) 挾間久,「豊後大友物語」, 昭和48年, 大分合同新聞社　320－321頁。
(6) G. Schurhammer, Das kirchliche Sprachproblem in der japanischen Jesuitenmission des 16 u 17 Jhs, Tokyo 1928.
(7) ガーゴ書翰　1555年9月23日, 平戸発「日本通信」上 160頁。

H. Cieslik, Balthasar Gago and Japanese christian terminology,「布教」1954, 86－87頁。

(8) ダシルバ書翰　1555年9月20日, 豊後発,「日本通信」上 131頁。
(9) シュールハンメル,「山口の討論」, 127－160頁。
(10) フロイス　日本史　I　143頁。
(11) ダルカセバ書翰　同上　79－81頁。
(12) ダルカセーバ書翰　同上　78頁。
(13)　〃　〃82, 92頁。
(14) ガーゴ書翰　同上 150頁。
(15) ガーゴ書翰　同上 152頁。
(16) ダルカセーバ書翰　同上　81頁。
(17)　〃　〃　〃
(18) ガーゴ書翰　同上 162頁。